

## 第4回 精神障がいのある親とその子どもの支援に関する学習会 報告

2018.7.6

平成30年5月12日(土)13:00～、東京医科大学 第一看護学科棟にて「第4回 精神障がいのある親とその子どもの支援に関する学習会」を開催しました。

当日は102名(スタッフ含む)の方にお越しいただき、地域別でみると関東エリアの方が73名と多く、東北1名、三重を除く東海9名、関西7名、中国1名、九州・沖縄1名、三重7名、不明3名と各地からお集まりいただきました。これまでの学習会の参加者数(40名程度)に比べ、大幅に人数が増えたのは、東京開催だったことや話題提供していただいた円グループ・PCG(Parent Child Group: 精神障がいのある親とその子ども双方を支援する集団を活用した取り組み)への関心が高かったからではないかと考えています。職種や立場は、医師6名、看護師・保健師36名、社会福祉士・精神保健福祉士23名、臨床心理士7名、作業療法士2名、保育士・幼稚園教諭3名、相談員・相談支援専門員5名、大学生・大学院生5名、当事者・家族18名、その他10名と、いろいろな立場の方にお越しいただき、活発な意見交換ができたと思っております。



### 第1部：話題提供とディスカッション

まず初めに、(株)円グループ 寺田悦子さんより、PCGの概要説明として、『精神疾患を持つ子育て世代を対象としたPCG事業報告』を紹介していただき、2番目に親グループのつながりの様子を事例を交えながら訪問看護師の小野加津子さんから、3番目に子どもグループの目的や取り組みを金関舞さんからご報告いただくという流れでした。



その後、PCGがどんな風に展開されているのか、実際のPCGの場面をPCGに参加されているお母さま方にご協力いただき、その場で再現していただきました。自己紹介から始まり、2人1組で相手の話を聴く練習(ペアワーク)、育児や自身の事についての語り、ペアワーク…と流れていきます。ファシリテーターの岩井さんがかもし出す穏やかな雰囲気の中で、この日の語りでは、“ゲームの選び方・与え方について”と“子どもにとっての祖父母や父親との関わりについて”が、それぞれの工夫も交えながら語られていました。参加者もファシリテーターも自由に発言。そんな日ごろのやり取りが垣間見える場面でした。

ミニPCGにご参加いただいた方々、ありがとうございました。

ミニPCGにご参加いただいた方々、ありがとうございました。

その後、円グループの PCG の取り組みを中心に、フロアーの参加者の方とディスカッションをしました。やり取りの概要を紹介します。

PCG 参加者：PCG に通い始めた頃は苦しかったが、同じ悩みを持つ母親と言葉を交わし、他の母親から吸収できるものを吸収し、PCG と繋がってきた。PCG がなかったら今の自分はなかったと思う。参加できたことを感謝している。

司会者：どんな風に繋がっていったのか？

円：訪問看護から始まったが、そこに相談支援専門員として関わるようになってから、訪問看護・児童相談所・施設職員が参加するカンファレンスを定期的で開催してきた。行政からは子育てができない母と見られていたが、対象の変化を伝えていくことで、今は一緒にやることができ、関係機関も広がり、支え合っている。

Q1：両親が精神病。今も支援には繋がっていない。他の人はどういうきっかけで支援に繋がったのか？ もの心がついた子どもがどう接すればよかったのか？

A1-1：退院後、あちこちの行政に泣きついた。保健師にも来てもらったことがあるが、PCG には繋がらなかった。友だちにコンボの雑誌に情報が載っていると教えてもらって PCG を知った。自分で連絡して繋がった。

A1-2：障がい者とわかってもどこにも繋がらなかった。毎週、行政の窓口で泣いていた。「支援が必要な人」と認識され、担当者（保健師）の支えもあり、病気を治すためにデイケアに通うようになった。子どもを守りたい気持ちとそれを支えてくれた保健師さん、いい支援者に恵まれた。自分の気持ちを強く持って、どこかに発信すれば誰かが見ている、それを叶えてくれたり、頑張っていれば肩を叩いてくれるものだと思う。

円：家族会から相談を受けることもある。これまでの経験からいろんな情報を持っているので、相談の中でいろいろやっている。受けたら他には回さないように心がけている。どこの地域にもそういう事業所や一生懸命な方はいるので、そういうところと繋がって、小さな点から輪を広げていけるとよい。

Q2：繋がれなかった家族にどういった支援があるのか？ 母子支援の取り組みは多いが、父親が当事者の場合の支援にはどういったものがあるのか？

円：事業所の中でどうしても限界はある。

PCG 事業も、助成金がもらえなかったりスタッフの世代交代があったり、うまくいかない時期もあった。行政と一緒にやっているとよいが、それができている市も少ない。広がる仕組みを作っていくことが課題と思っている。

PCG には父親も参加し、子どもグループに入って男性スタッフと活動している。父親のグループも作ってほしいと言う要望はあるが、今やっていることが精一杯で父親のグループまではできていない現状。



A2-1：自分がどこに繋がれるのか？と思った時、何も資源がなかった。父親として自分が助きたいもの、大事にしたいものを発信していくと、周囲から何かしら知恵が出てきたり、実際に必要なものを作っていけば良いのではないか。

A2-2：虐待やDV被害者の父親グループを見相でやっていたが、2～3人の父親が対象だったため、コスパが悪すぎるとのことで3年ぐらいでやめてしまった。児童相談センターを中心にずっとやっている先生もいる。

Q3：個別のケースに関して、主治医やスタッフが一緒に入っていくことでうまくいったりすると思うが、医療機関とどんな風に情報提供しあえると良いのか？連携が図れた時は、何が良かったのか？

円：PCGにエントリーする時は、必ず主治医にも了解を得るようにしている。訪問看護が入っている方が殆どだったので、訪問看護を通じて医療やその方を支えている支援者と連携する形になっている。PCGが浸透しつつあるという状況の中では、クリニックの先生から紹介という例もある。

司会：精神科やクリニックの先生は、PCGのことをどうやって知るのか？

円：市区町村ではMCGがある。未就学児と就学児では担当する部署が異なり、隔たりがある。その対象にとって何が大事かを考えて動かなければいけないが、人に関心を持ってない支援者だとそれが難しくなる。支援者がどれだけ情報を持っているかによって、選択肢も変わってくる。

感想1：子ども家庭支援センターの相談員。障害を持つ母親への支援で何が必要かを学ぶために参加した。自分の市に持ち帰って今日の話伝えたい。PCGに参加されているお母さん方の話、生の声を聴き、一人ひとり考え方も違うし悩んでいることも違う、受け止めなければいけないと勉強になった。

感想2：医師の立場だが、診察室に座っていなければ何もできない。繋げるというキーワードに惹かれた。福祉と医療を繋げるという言葉に惹かれて何かしようと思った。支援も完結したからよい、完結しなかったからダメではないと思う。診療を良くする工夫など医者意識も変えたいと思い、質問促進パンフレットを作成した。

Q4：覚醒剤依存の母親への支援に関する事例はあるか？診療に付き添って、言いにくいことを代弁して伝えたりする取り組みもある。主治医への助言や主治医に伝えるための工夫で事例があれば、教えて欲しい。

円：覚醒剤の方は多く、訪問看護が入っているケースが多い。主治医は覚せい剤のことは言わないので、特にそのことを意識しているわけではない。訪問看護は医療的な支援もあるが、子どもがいると、子ども家庭支援センターや児童相談所と繋がっている。PCGでは、診断名はあまり意識しないで対応している。結果としては良かったと思うし、子どもを何とかしたいというところで活動している。訪問看護を10年やり、長期にわたって関わっているので、みれている部分もある。医者は患者さんの日常生活についてはあまり知らない。覚醒剤であろうが統合失調症であろうが、母親は子どもが好きで、子どもも母親が好き。訪問看護に行くとそのことが良くわかるので、そういうことをある

程度伝えていく。しかし、問題は起きるので、子どもが施設に入所し、親子が分断されてしまうこともある。親子が帰ってきたらまた私たちが支えていく。覚醒剤をやっている人も変わる。周りが支えていくことは大事なことで、変わることを信じてやるしかないと思う。

## 第2部：今後の学習会の進め方と各機関の情報伝達

### ☆ 各機関からの情報

#### 1) ヤングケアラー：

ケアを担う子どもの支援と調査を行っている。  
学校の教員を対象とした調査、高校生への調査も。

#### 2) ひとりやないで！：

統合失調症を持つ親の子どもの会。ホームページ・ブログあり。奇数月に語りの場、偶数月に懇親会、年2回勉強会を企画している。

#### 3) 京都 子どもの会：

奇数月に語りの場。各地より参加している。  
京都の家族会では、配偶者やきょうだいの集いも開催している。

#### 4) 訪問看護 音：

その人の強みを生かす支援や多職種連携を意識している。  
新宿区にも拡大している

#### 5) こどもびあ：

平成30年1月～精神疾患を持つ親の子どもの会。3ヶ月に1回、少人数のグループで語り合う。東京・大阪で実施。20～60代の方が参加。学習会や発表会も実施している。

#### 6) 配偶者の会：

精神障がいのある人の配偶者・パートナーの会。2ヶ月に1度、東京で集いを実施。子連れもOK（こどもびあの協力あり）で、これまでに延べ人数45名の方が参加している。

#### 7) 福岡子どもとパートナーの会：

今年から実施、3ヶ月に1回、ピアカウンセリング。Facebookもある。

#### 8) プティパ：

埼玉。街のソーシャルワーカー、子育て家族応援。生活者としての語り。9月30日あんしん子育て学習会として、「ー精神疾患のある母親をケアする子ども・若者の支援について考えるー」をテーマした学習会を企画している。

#### 9) 親子支援（上野先生）：

フィンランドで行われている家族丸ごと支援をもとに、親向け・子ども向けの本を作成。ストレングスの視点でアセスメントし、支援へと繋げていく。妊娠期からの関わり（ネイボラ）。

#### 10) 都立中部精神保健福祉センター：

パンフレットやセンターの紹介



11) カンガルーの会：

子育て支援を考える PSW 有志の研究会。事例検討から支援のあり方を考える。子ども支援と親支援を繋ぐ。これまでにチェックリストを作成。保育士向けのパンフレットも作成。

12) 夏苺先生

約 7000 人の協力を得て、精神科医のコミュニケーション能力の調査を実施。冊子にして病院に置きたい。そのためのクラウドファンディングを実施する予定。

13) 松宮先生

虐待か否か、虐待と判断しない PSW との違いは何か？ これらを学会で伝えていきたい。

14) ぷるすあるは

絵本とチラシで情報を届ける。Web サイトの子ども情報ステーションは今年で 3 年目になる。いろんな情報を寄せてもらえれば

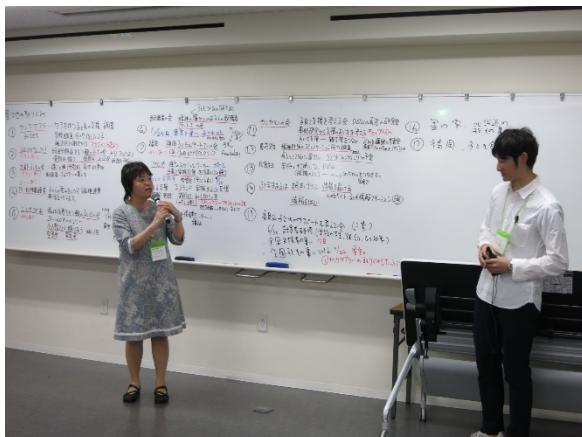
15) 親&子どものサポートを考える会

毎月第 3 日曜に子どもの集いを開催。第 6 回全国版子どもの集いを 11 月 24 日に愛知県で開催予定。今年度はイギリスのヤングケアラーの取り組みについて、森田先生に伝えてもらう予定。学校の先生・民生委員らを対象にした支援者研修を 6 月 30 日に実施予定。

16) 星の家：

北海道で立ち上がった子どもの集い

17) 福岡で子ども食堂等の活動が始まった



☆ 今後の学習会の進め方

第 4 回の学習会は、102 名と多数の方に参加いただき、話題提供後の質疑応答も様々な立場・視点から、活発な意見交換が行われ、充実した時間になった。どのようにして支援に繋がったのかなど、ご自身の思いを語ってくださった PCG 参加のお母さま方に敬意を払いたい。時間がなく、第 5 回の学習会の希望をこの場で募ることはできなかったが、今回、情報発信をしてくださった各機関の取り組みなどから、次年度の学習会のテーマを決めていきたい。

ご参加いただいた皆さま、話題提供いただきました円グループの皆さま、ご協力ありがとうございました。

文責：土田